2014・2号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

35号

2014・12-2015・6

◉特集◉

越後国府・越後守護所・春日山城・福島城・高田城へ至る道

「高田開府400年」の意味

その3 高田城は危機管理の城

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

ぶらっと道草（みちくさ） 港まち直江津

ロングインタビュー

えちごトキめき鉄道社長 嶋津忠裕さん

地域鉄道は地域の元気と両輪で走る

歴史は「今日」への手紙

福永十三郎の恩

ぶらっと路草（みちくさ）　港まち直江津

野本　幸

海岸近くで生まれた私は、生活の音や声が聞こえてくる小路（しょうじ）を、幼い頃、祖母と手をつなぎ、よく歩いた。歩く先の空は夕焼けで赤く染まっている。「はよ行かんきゃ、沈んでしまうわ！」と急ぐ祖母と駆け足で海へ向かう。間に合った！　水平線が見えると、祖母は夕日に向かって手を合わせた。「今日も一日ありがとう」。幼い自分も手を合わせて祈りに加わった。大人になるにつれ、慌しさの中で小路の記憶はかき消されていたが、昨年、直江津のまちあるきにお誘いいただいた時、その記憶は昨日のことのようによみがえった。幼い頃は気にも留めなかった小路が、今も息づいているこのまちをとても素敵に思えた。

こうした海岸につながっている小路は、海辺のまちには必ず存在している。直江津の海の向こうには佐渡がある。佐渡には、国道が一本走る。この道は、新潟市から佐渡市を経由し、海を渡って直江津に入る。この海の上の道も国道三五〇号なのだ。そこを航行するのが佐渡汽船だ。直江津・小木航路のカーフェリーこがね丸に乗り、佐渡へ行く旅人が、全国から直江津港を経由して佐渡へ行き来している。こがね丸での二時間四〇分の旅を快適なものにするため、船内イベント企画に関わる機会をいただいた。県外からのお客様と話をしていく中で、「直江津」「上越」の知名度が極めて低いことを知った。佐渡からの帰路では、直江津港で下船し、そのまま観光バスかＪＲ直江津駅へ直行し、直江津のまちなかを見ることもなければ魅力もわからないというのだ。

道を使った魅力的なまち歩きの提案ができないものかと考えさせられた。住民にとっては日常の何気ないまち並みでも、外から来た人たちには、歩くことでその土地の文化を知り触れることができる。直江津で、さまざまな道使いができないかとの思いが走る。

佐渡から帰ってきた旅人に、直江津のまちなかの魅力を知ってもらう方法として、今年の八月から十一月まで取り組んだのが、ＮＰＯ法人女性みちみらい上越が企画した「ぶらっと港まち直江津号」だ。直江津港からまちなかを巡りＪＲ直江津駅へ到着する二時間のコース。参加費は昼食付で一五〇〇円。佐渡からの旅人向けのちょっとした道草だ。疲れた旅の帰りのため、移動手段

はバス、昼食をセットにした。チョイスは地元の皆さんのオススメ店。案内するのは直江津弁のガイド・保坂清美さん。佐渡汽船直江津港ターミナルを出発した一行がまず寄るのは、にいがたの名工の笹団子屋「岩野屋菓子舗」。試食をいただくとつい買ってしまう。次にランチ。名店「春ちゃん」の海鮮丼か、ライダーに人気の「ニューハルピン」のラーメン。実はどちらも私には初めてのランチで超感激！　その後、ライオン像のある旧直江津銀行の中で、直江津まちなかアテンダントでもある小松光代さんの語り「安寿と厨子王」を静かに聞く。そういえば小学生の頃、仮装盆踊り大会に従姉妹と出場し、安寿と厨子王で入賞したんだった！　親になった今、改めてこの物語を聞くとまた違う感情がわく。その後、一行は、直江津駅前の雁木を歩いて「三野屋菓子店」「石田弥菓子店」「かねきゅうぼし」などへ寄りＪＲで帰路へ。

この「ぶらっと港まち直江津号」には、上越市民の皆さまからも多くご乗車いただいた。「同じ市内に住んでいるのに知らないところがたくさんあった」「また改めて歩いてみたい」「今度はお友達を誘って行ってみたい」といった声をいただいた。

道草は、とっても素敵な道使い。北陸新幹線がまもなく開業し、「金の島」佐渡を目的地とする人は直江津港を通る。潮の香りに誘われて「ぶらっとまち歩きでもしてみようかな」と道草をしてほしい。いや、直江津は、「路草」がいい。港まちならではの小路から聞こえる生活の息遣い、夕焼けがまぶしい風景、新鮮な食べ物、そして粋のいい人たちと出会えて暖かい気持ちになること、間違いないのだから。



のもとみゆきさん
旧能生町生まれ。糸魚川市在住。
㈱エム・コミュニケーション　㈱エムコミ・ネットワーク代表取締役として地域活性化に関わる企画コーディネートを行なう。そのかたわら、ＮＰＯ法人女性みちみらい上越理事長、ＮＰＯ法人上越はつらつ元気塾理事・事務局長、ＮＰＯ法人新潟ＮＰＯ協会理事、新潟県ウオーキング協会事務局長、アルプス塩の道交流会議事務局長、新潟県観光復興戦略会議委員、新潟県ＭＩＣＥ研究協議会幹事。そしてフリーアナウンサーなど、八面六臂の活躍。

ロングインタビュー・平成26年9月24日　インタビュアー　北越出版／上越信用金庫梅田実

■えちごトキめき鉄道社長　嶋津忠裕さん

地域鉄道は地域の元気と両輪で走る

プロローグ

いよいよ来年三月一四日、北陸新幹線が金沢まで延伸。それに伴って並行在来線となる信越線の妙高・直江津間、北陸線の直江津・市振間が「えちごトキめき鉄道」として開業する。

すでにインタビューされつくしている感もあるが、「トキてつ」のあり方や地域との関わりなどを少し角度を変えながらお聞きした。インタビューは二時間近くにもなり、内容も多岐にわたってお答えいただいたので、行きつ戻りつの内容になっているが、嶋津社長の「トキてつ」に掛ける熱い想いをお読みいただきたい。

あちこちでインタビューを受けられて、「またか」って思われるかもしれませんが、念のため（？）、プロフィールから。お生まれは。

昭和二〇年です。四月一七日で、一応、かろうじて終戦前です。

熊本県の人吉というところで生まれました。山の中の盆地―人吉盆地―です。ちょうど熊本と鹿児島の県境で、鹿児島は島津家、熊本は加藤清正あるいは細川さんとか、その二つの大きい藩に挟まれて、相良藩（人吉藩）というのがあります。お城があって、一応、城下町なんです。

温泉もあります。小さいですが、ちょっとした観光地ですね。そのせいか元々、観光にはすごく興味があった……。

その後、父の仕事の関係もあって東京に出て、慶應大

学から藤田観光という観光会社に入りました。

藤田観光というと……。

観光業、ホテル・レストラン業ですね。ホテルも、シティホテルもやっていればビジネスホテルもやっている。あるいはリゾートホテルもあって、全国に色々ありましたが、今は大分、縮小しています。ビジネスホテルではワシントンホテルが全国展開をしていました。

私は主に東京の目白の椿山荘、結婚式場で有名ですが、そこを中心にした仕事をやっていました。ちょうど椿山荘の総支配人をやっておった時に、藤田観光に見切りを付けられたのかどうか分かりませんが、熊本県人会で「観光に従事している人で、誰か鉄道会社の社長をやる人がいないか」という呼びかけがありました。親会社の会長が熊本出身でして、「嶋津君どうだねえ」と話がきまして(笑)。親会社の会長から言われるんじゃ、「俺はもう藤田観光では芽がないな」と思いまして(笑)。

一応、藤田観光の役員をやっていましたが、私自身ちょっと、企業人生に若干の疑問を持っていたこともありまして、五七歳の時ですが、「がんばります」と言うことになった。

どんな鉄道会社ですか?

いわゆる並行在来線。熊本と鹿児島にまたがる「肥薩おれんじ鉄道」です。六年間やらせていただきました。行ってみましたら、なかなか大変(笑)。大体、お分かりだと思いますけれど、地方の鉄道、―在来線の経営ってすごく大変なんです。天下のJRでも、切り離したいと思っているくらいですから。県庁所在地を中心とした近郊の利用客は、まあまあある。ところが「肥薩おれんじ鉄道」は二県にまたがっていながら、熊本から大体三〇㎞、鹿児島からは四〇㎞ぐらいの両端が分離されなかった。そこはJRは離さないです。県庁の周辺だけ(笑)。

しなの鉄道と篠ノ井線みたいですね。

そうそう(笑)。ですから八代(熊本県)から薩摩川内まで、二県にまたがってキロ数は一二〇㎞ぐらいで、すごく長いのですが、利用客はもう本当に少ない。どの区間を分離するかっていうのはJRに選択権がある。必





■プロフィール

1945年　熊本県人吉市生まれ
東京都立戸山高等学校・慶應義塾大学経済学部卒業
1971年　藤田観光株式会社入社
箱根小涌園事業所・東京椿山荘事業所・本社経営企画部等・椿山荘事業部企画室長・本社人事部ニューキャリア支援センター長・執行役員椿山荘事業所総支配人を歴任
2003年　肥薩おれんじ鉄道株式会社代表取締役社長
2010年　新潟県並行在来線株式会社（現えちごトキめき鉄道株式会社）代表取締役

要ならば分離しなくてもいい。

―北陸新幹線開業で―富山県みたいに全部、分離してもいいわけです。どっちも許される。ＪＲなりの理由があるんでしょうけれど……。

この県境区間、両端とも輸送密度が分離当時は、だいたい一日一㎞あたり一二〇〇人と言われていました。今はもう一〇〇〇人切っていますね。ですから北陸線並というか、ちょうど直江津・糸魚川間の「（えちごトキめき鉄道）日本海ひすいライン」の輸送密度ぐらいですね。「妙高はねうまライン」よりも低いわけです。ですから、とにかく売上がなかなか上がらない。まあ、色々やりましたけど、何をやってもなかなか結果に結び付かない。

とにかく手当たり次第なんでも出来るものからやろうと……。当初、成功するのは一割ぐらい。一〇本に一本ぐらいは（笑）。そんな感じでした。開業三年目で、だんだん打率が上がってきました。一年目、二年目はガクンガクンと減っていたんですが、今までやってきたことが色々実を結び始めたんだと思います。初めてですね、利用客数と売り上げが前年を上回った。ということで、みんなに喜んでもらいましたし、沿線も活気づいてきたといいますかねえ、元気づいてきたといいますか。

利用客増をもたらしたものは。

結局、何をやったか、あるいは何が成功したというと、鉄道会社だけの色々な企画イベントだけでは、どうしても飽きもくるし、限界もあるわけです。

やはり地域と一緒になって、色々なイベントをやったり、沿線外に呼びかけをして、外のお客を呼び込む。これには地域と一体となってやらないと、なかなか成功しないんだなということを非常に実感しました。

皆さんも苦労されていると思いますが、「こういうのをやってますよ」と、外へ発信する。広告宣伝費もそんなに無いですから、どうやって発信していくのか、メディアとの良好な関係づくりが非常に重要です。

いろいろな形で努力して、諸々のことが実を結んで初めて出来る。結局、イベントだけとか、イベントの内容がよくてもダメ、情報を発信していく必要があります。それには鉄道会社だけでなく、地元との連携も必要です。そのうちの何かが落ちてもダメなんです。そういうこと

を色々と勉強させていただきました。

具体的に言うと、駅前がすごく寂しいですね。ここもそうですけれど、乗降客も少ないから駅舎もあんまりきれいじゃない。観光客を迎えるような体制になっていない。「まちめぐり」にしても、駅からどこか回ろうとしても情報が手に入れにくい。それを沿線だけでなく沿線外にも情報を発信しなくてはいけないわけです。

沿線外から来る場合に、鉄道が不便であれば、結局、使ってもらえないわけです。

「おれんじ」でやったことは、とにかく鹿児島と熊本両県庁所在地に直通列車を走らせたいということで、快速の直通列車を土・日・祭日に走らせたんですよ。熊本と鹿児島は一番大きなマーケットですから、そこに直接呼びかけもできますし、それにマスコミも取り上げてくれる。車内に車額とか中吊りのポスターを出したり、JRさんにもお願いして鹿児島の駅舎、あるいは熊本の駅にポスターとか、色々なチラシを置かせてもらう。自分の沿線だけでなく、そこを飛び出して情報を発信していく形を作りました。

海水浴列車を走らせたとか……。

熊本は海側に山があって、海は干潟なんです。有明潟とか。だからいい海水浴場がない。熊本の人はどこへ行くかというと、天草まで行く。

天草は橋を渡っていきますが、道路がものすごく混む。「おれんじ」沿線には「芦北」という所があって、御立岬公園などのいい海水浴場がある。天草まで海水浴に行くんだったら、沿線の「芦北海岸」を売り込めば、海水浴に来るんじゃないかということになった。

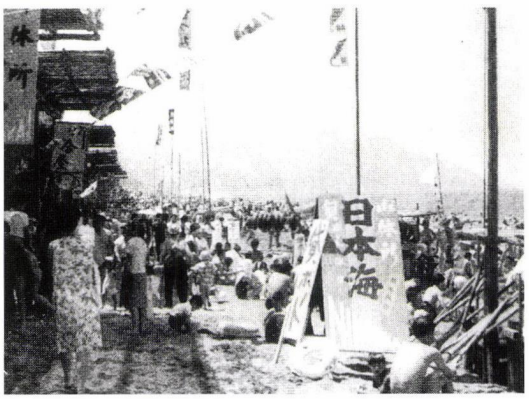
熊本まで快速列車が走りますから、そこへ呼びかけに行ったんですが、それと同時に熊本駅だけじゃなくて、熊本市の特に学生の多い駅の広場で、ちょっとした団扇みたいなもので直通列車の割安切符を作って、高校生とか短大生、特に重点的に女の子に配った。熊本から「海水浴へ行こう」って言って、「熊本から列車に乗って、そのまますぐ海水浴場にドボン」って宣伝しました。結構、女子高生がわんさか来ましてねぇ。そうしたら、大学生は今、車を持っているんですが、それを目当てにまた男の子が鉄道に乗って来てくれました（笑）。これはターゲットを絞り込んだ成功事例ですね。

昭和三〇年から四〇年初頭には、長野から直通の海水浴列車が、谷浜まで走っていました。地域とのつながりが一番……。

そうですか、海水浴列車を出すっていいですよね。ですから、どういうターゲットに、どういう風にして、なにをアピールするか。そういうところを色々と勉強させてもらいました。

ここで一番重視しているのは地元とのつながり、盛り上がり、あるいは自治体とか、駅周辺の方々との連携、あるいは色々なイベント、街歩きとか、そういうものを沿線の駅ごとに作っていく。それぞれ色々な形で作っていけば、呼びかけやすくなるし、なにより来たお客様が、地域が盛り上がってくれていると、そこから地域の人との触れ合いができるわけです。

観光というのは、地域の人とのつながりが一番だと思うんです。決して、物だけでもないし風景だけでもない。どんな美しい風景でも、ただ存在しているだけでしたら、



海水浴客でにぎわう直江津海水浴場
昭和年 30 年代


糸魚川天津神社の勇壮なけんか祭り
（国指定重要民俗文化財）

一回観たら飽きちゃいますよね。

しかし、日常を離れて地域の人たちと触れあう、地域の人から、その土地の風景や歴史、物語を聞いたり、土地の人とのつながりができて会話が生まれると、もう一回行ってみたいという、リピートにつながる。

鉄道の旅客と地元の人との交流が生まれるような旅の提案や情報発信ができるといいなあと思います。

地域の行事を熱心に見ていらっしゃる。糸魚川の「けんか祭り」でお会いしました。土砂降りの雨の中で…。

本当にここには観光資源は非常にありますね。あるけれど、観光資源を有効に使って、お客を楽しませるような、受け入れ態勢というか、おもてなしの態勢というか、あるいはそういう機運というか、そういうものができているか……、そこは非常にプアですね。

こんなこと言っては失礼になるかもしれませんが、遅れているといいますか……。素材はいっぱいあるわけですから、皆さんとお話をしながら、たとえば直江津には色々な物語もありますね、その街にほれ込んで、それをどうやって外から来る人に観ていただこうかと頑張っている人たちがいる。そういうものをどうやってご紹介していこうか……。

まあ、そういう方は各地にいらっしゃるわけですよ。高田にもいらっしゃるわけだし。もちろん糸魚川にもいるだろうし、あるいはそんな大きい駅でなくても名立とか能生とか、関山とか二本木とか。筒石のトンネル駅もあるし。信越線に唯一残されたスイッチバックもあります。そういう素材はいっぱいあるわけです。

それをどうやって地域の方と連携してやっていくか。そしてどういう形で外へ発信しアピールするか。開業一年後ぐらいになりますけれど、「越乃 Shu ＊ Kura」みたいなリゾート列車を導入する予定でおります。

どんどん外に情報発信しなくちゃいけない。

リゾート列車を長野、あるいは長岡まで走らせるとか、「ほくほく線」などの他社線とも協同して、各地からお

客様を持ってくるとか、送りこむとか……。これからの地方鉄道では旅のプロセスを楽しませるリゾート列車が有力だと思います。それらが相互乗り入れをやったりしていると、結構、おもしろい鉄道の旅の形が生まれると思います。

今は、どうしても車での旅、観光が主流ですが、少しでも鉄道が食い込んでいけるようにする一つは、やはり新幹線。もう一つは、ゆっくり楽しんでもらうという意味での在来線。その在来線がそれぞれ魅力ある目玉列車を持ったり、あるいは特徴のあるところを運行する。

トキてつでは、季節によって運行区間を変えようかなとも思っています。色々な所へ走らせることで、お客さまと地域との交流が深められていくのではないかと思いますね。

話はちょっと戻りますが、今の「トキめき鉄道に社長さんとして入られた経緯は？

第三セクター鉄道協議会というのがありまして、私も「おれんじ鉄道」で出席していました。そこで「北越急行」の大熊（孝夫）社長さんと非常に懇意になりました。

「おれんじ鉄道」を辞めた後、大熊さんから「今なにしているの、一度、新潟へ遊びに来ませんか」と誘われて……（笑）。そしたら「いやー嶋津さん、知事が会いたいって言ってますよ」って。あっはっは、上手く乗せられました（笑）。知事にお会いした時は、今から四年前くらいでしょうか。

県の参与という形で、結局、御世話になることになったんですけれど、開業はまだだいぶ先だなと思っていたら、あっという間にもう半年にせまって来ちゃいました（笑）。

鉄道の経験がある方が来ていただいて、非常に心強い。富山の方は鉄道経験者ではない？

富山はトラベル会社の方が社長。旅行会社でがんばってこられた方で、何回かお会いしています。観光面では非常に素晴らしい。しかし鉄道となると、少し違うジャ





二本木駅　全国でも数少なくなったスイッチバックのある駅、看板もある





筒石駅　地下トンネルの駅としてファンが多い、高低差 40 m、約 200 mの階段のトンネルの先に駅

ンルなんで苦労されると思います。

うちの会社はＪＲの運輸とか設備関係、そういう人たちが中心ですから、あんまり観光とは直接関係がない。社員はどうやって東と西のＪＲから引き継いで安全運行をやっていけばいいのかという仕組み作りを考えている。なおかつ、ここは西と東の混合部隊ですから、まずは開業まで手一杯なところがありますからね。

ＪＲ東と西、「トキめき鉄道」、「ほくほく線」と、さばかなくてはいけませんし、社員育成もある。

そうです。

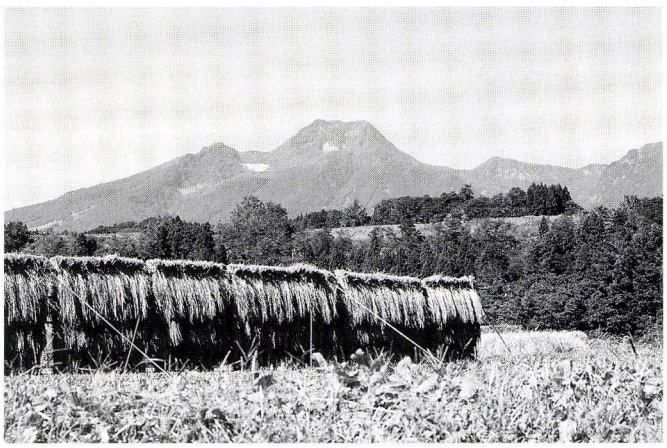
一〇年間でこの会社をＪＲ出身者ではなく、生え抜きの社員にする。今、若手社員を採用していますけれど、彼らを早く育成して一人前に仕立てないといけない。ＪＲの人たちにも、早く一人前にしてくれないと、皆さんも帰れないんだよと言っている（笑）。

社員の育成も重要ですし、隣接の鉄道各社と良い関係を作っていくのも一番大切……。

明治時代、信越線が通った直後に旅をした外国人が、「こんなに素晴らしい車窓の景色を観たことがない」と、紀行文に書いています。私たちは、慣れちゃっていますから…。

印象は、もう素晴らしいですね。

「雪月花」って、日本の四季を表す言葉だということを初めて実感しました。ああそうか、ここは雪が降る四季だから「雪月花」なんだなと、新潟の四季の素晴らしさ……。これは九州じゃ味わえない四季ですね。九州に







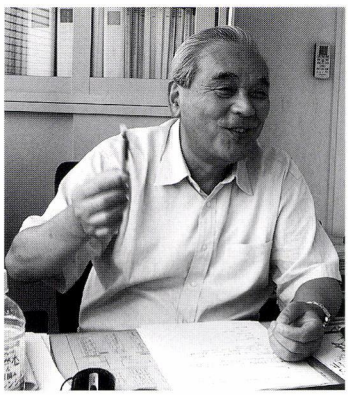
妙高山のすそ野から日本海まで、豊かな自然が広がる

は雪がないですから。やたらと夏が長くて冬が短い。新潟は冬が長いといえば長いんですが、四季それぞれの違いはすごいなあと思いますよね。

大学時代、野球やっていましたが、妙高に合宿で来たことがあって、グラウンドから見上げる妙高山の素晴らしさというか雄大さというか、鮮烈な印象として残っています。

鉄道でもそうですね。特に二本木あたりから登って行く途中の妙高山の風景は素晴らしいですし、頸城平野の豊かな田園風景を走って直江津の方まで来ると、今度は海岸風景が見える。雪の時は全く様相が変わってきますし、日本海の冬の荒海、なかなか見る機会がない。すごく感動しますよ。ですから「豪雪見学ツアー」とかね「日本海荒海ツアー」とかできると、非常に面白いと思いますよ。

転勤で来た人が、あまりにも食べ物が美味しくて、家を建てて住んでしまったという話を聞いたことがあります。こちらへ来て一番印象深かったのは？　雪が深いとか。ご家族も一緒。



家内と来ているんですが、九州も魚は旨いんですが、全然違いますね。種類も違うし、なんて言っても新鮮だし安いし。魚だけでなく野菜も美味しい。

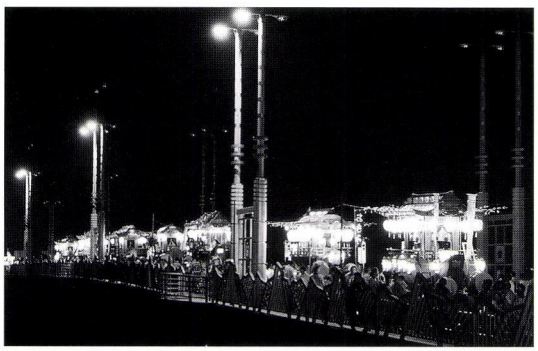
今、高田に住んでいますが、なにか「ほど良い」といいますか。例えば東京で、ちょっと評判がいい、美味しい、あるいは面白いとかっていうと、えらく込みます。並んでいる人を見に行くような感じで、ちっとも、ゆったりした気持ちで楽しめない。ここだとゆったりと、誰にせかされるでもなく楽しめますし、本当に程ほどに色々なものがあって、住むのにも「ほど良いまち」だなあと思っています。

あまりにも「ほど」が良すぎて、素早い動きがないから、のんびりしすぎると言われる（笑）。

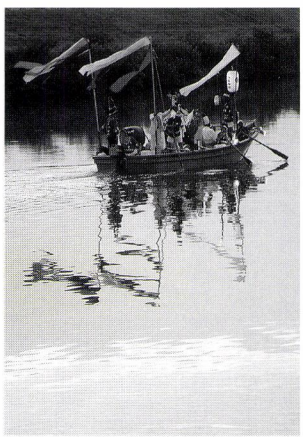
そうかもわからないですね（笑）。よく冗談で言うんですが、九州はすぐ盛り上がるんですよ。ブワーっと、かなり短期間で。例えば新幹線開業だというと、みんなで沿線で手を振ったりとか、「おれんじ鉄道」開業だというと、みんなワッと押しかけてきたりとか。

地域の人も「よし、じゃあ盛り上げて〈やるやる〉」っていう感じで、みんな〈オレが、オレが〉って、結構出てくる。すごく盛り上がり、火が着くのは早いんですが、実はですね、一年か二年たってくると、だんだんしぼんできちゃう。「アレ？」って。だんだん人がいなくなるといいますか……（笑）。

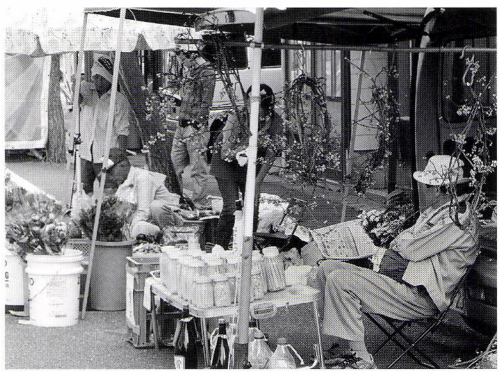
それがご当地はなかなか火が付かない。なかなか付かないんですけれど、火が付いたら結構、粘り強くやっていただけるのかなと思っているんです。実はそれを楽しみにしておりますけれど……（笑）。







三八朝市は豊富な食材を食前に提供する
1000年の歴史を誇る祇園祭　高田城下への出張も400年前から続く





祇園祭のお饌米納めでお会いしました。まちの中では盛り上がっていますが、ほとんど観光客がおりません。よく言えばコンパクトで、大型観光には結び付きませんが、どんな印象ですか？

すごいなーと思いますね。歴史的なもの、祭とか神事、伝統を非常に大切にしておられる。あれだけの人が参加されて、たくさん屋台が出ているのは非常に壮観ですね。

大町に住んでいるんですが、マンションの真ん前にお旅所ができるんです。遠いところからわざわざ神輿をお迎えして……。

私、お神輿の追っかけやりましたけど、稲田で船に乗せて、非常に幻想的でした。四〇〇年の歴史ですね。こういうのを大切にしないといけないと思いますが、もうちょっと情報発信の方法を変えてみたら……。

昭和三〇年代ぐらいまで、川下りの時は臨時列車が出ていました。今、ちょっとウロウロしてると最終に乗り遅れる人たちも出てくる。

そうなんですか。祇園祭があっての花火だと思いますから、見どころの写真を撮って、どんどん発信していくと面白いんじゃないかなと思いますね。

鉄道の基本は「生活の足」だと思います。たとえば、あと二〇年ぐらいで団塊の世代が車の免許を返上する年齢になる。車では移動できなくなった時、定時に安定して移動できる鉄道は、非常に重要になってくる。生活の鉄道としてのお考えは？

まず一番多い利用者は学生ですね。少子化で減っては来るでしょうしょうが、高田には学校が集中している。ですから列車通学生が激減することはないと思っています。まず、通学のルートをどのように確保していくのか。その時に直江津での接続が一番のポイントだと思っています。

これは学生だけではありません。「日本海ひすいライン」と「妙高はねうまライン」、「ほくほく線」と「信越線」の四つの線路が全て直江津で繋がるわけです。この結節と、場合によっては直通のスムーズな乗り入れ、そういうものを目指していかなくてはいけない。そこが一番ですね。地域のことを考える時に重要なことは、やはり生活路線ですから。

もうひとつは、新幹線が上越妙高と糸魚川に停まるわけですが、その接続ですね、糸魚川方面は減りましたけど、新潟方面への優等列車は一応、確保されております。特急は生活路線というよりビジネス。これをいかにして新幹線との接続を良くしていくかということでしょう。観光以外の部分では、そこが一つのポイントですね。

あとは本数。やはり少ないですね。これをどうやって



平成 22 年　並行在来線株式会社
平成 24 年　えちごトキめき鉄道株式会社
　　愛称　トキてつ
資本金　66 億 7,710 万円
全　長　97㎞　全 11 駅
　妙高はねうまライン　直江津・妙高（信越線）　37.7㎞
　　しなの鉄道北しなの線に接続
　日本海ひすいライン　直江津・市振（北陸線）　59.3㎞
　　あいの風とやま鉄道に接続
　　（糸魚川で大糸線に接続）
　　ディーゼル車両運行



五智国分寺
観光客が期待される五智周辺

増やせるか。可能性があれば出来る限り増やすことも考えていきたいと思います。

直江津の飲み屋さんは、安くて料理がいいと評判で、金曜日の夕方、電車で飲みに来る人も多い。そこで、「終電がもうちょっと遅いといいのに」という声と、もう少し駅があるといいという声……。富山ライトレールは、駅を増やして運行間隔を短くしたら、乗る人が多くなった……。

県から予算が出てですね、新駅の候補地を調査しています。作ったことで、どれぐらいお客様が増えるかという需要予測とかを立てながら、出来る限り可能性のあるところは作れるいいなと思います。ただ、建設のお金となると、なかなか「トキてつ」では難しい。沿線の自治体、県や国からのバックアップをいただくことを前提として、出来る限り新駅を作りたいと思っています。

五智周辺は、国分寺や親鸞聖人の旧跡などがあって観光客が多い。「はねうまライン」と「ひすいライン」の分岐するあたりに駅を作れば、観光客にも便利になるという人がいる。確かに周辺は住宅街でもあります。

あのあたりのカーブのあるところは、駅は難しい。「ひすいライン」の五智公園あたりなら直線ですけれど…。

新幹線との接続、「かがやき」が停まらないということで、大変ショックを受けていますが、むしろ「トキめき鉄道」へ接続が良ければと思っていますが、新幹線が停まる時には必ず「トキてつ」が……。

もちろん「トキてつ」も接続を出来る限り取っていかなくてはいけませんが、やはり最優先して新幹線にピタッ！　とピンポイントで接続させるのはまずＪＲですね。特急「しらゆき」などピタッとやると思います。現在「はくたか」が越後湯沢でピンポイントに繋がっているようにリレー特急みたいな考え方で。特急とか快速などが走っていない時間帯に、うちの車両が繋がる。在来線は新幹線との接続だけでなく、他社線と接続も良くしなければいけません。特に「はねうまライン」は単線ですから、ある程度の時間間隔をおいて運行することになる。今、ＪＲを含めて各鉄道会社のいわゆる「スジ屋」ですね、彼らが一生けんめい協議しながら接続を作っています。自社だけでも作れないし、各会社と確認しながら作っているというわけです。

「ひすいライン」のディーゼル化への懸念もありますが、大糸線への乗り入れがスムーズになるともいえる。

リゾート列車の乗り入れはぜひ実現したいと思っています。紅葉の時期とか、観光的にいい季節を選びながら……。

三セクにとっては架線の維持費ということもありますが、それよりも「ひすいライン」の電流には直流と交流があり、梶屋敷と糸魚川間にはデッドセクションがあります。交直（交直流電車）は一両では走れない。必ず二両で走るということになると、三セクにとっては重荷になる。それでやむを得ずディーゼルを導入しようと……。一部の方に猛反対されました。「子々孫々に禍根を残す」と。

でもここだけは絶対に譲れない。私も「ディーゼル化しなかったら子々孫々に禍根を残す」って（笑）。長大トンネルの安全対策を実施する等の説明を尽くすことで、最終的にはご理解いただいたと思っています。

運賃の料金設定を含めた今後の展望は。





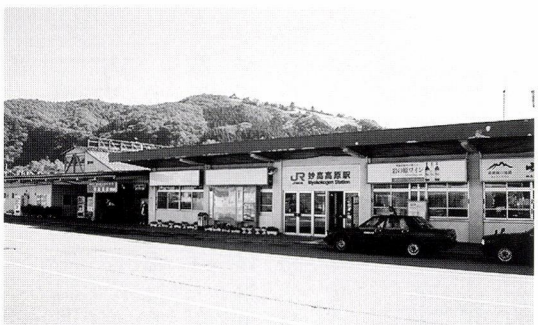
上越の新たな玄関口　脇野田駅（新幹線開業後・上越妙高駅）

地域交通としての利便性を確保しながら、なんとか今の利用客を減らさないようにする。それだけではなくて沿線外の利用客、つまり観光客をいかに増やすかということですね。再三お話していますが、地域の方と一緒になって連携していけば、少しは鉄道の利用客の減少に歯止めをかけることができるかと思います。

もし増やせてある程度改善されてくれば、五年後の運賃の値上げも出来る限り小幅に抑えることができるわけですね。

最大の目標を「利用客をどうやって増やすか」に置いて、色々なことをやっていく。それには「トキてつ」の楽しく明るい情報を外部に発信して行くだけではなく、地域の色々な魅力がさらに磨かれて、地域も賑やかに活性化していくということも併せて目標にして、地域と一緒に頑張っていきたい。

そういうことで「トキてつ」が、残っていければ、なかなか難しい時代ですが十分お役に立てる鉄道になっていけると思っています。



しのな鉄道北しなの線へ接続する妙高高原駅



北陸への玄関口市振駅　あいの風とやま鉄道と接続

「サポーターズクラブ」がありますが。

「トキてつ」のサポーターズクラブは、利用促進だけの単なるファンクラブとは、ちょっと違うんです。

みなさんから会費をいただきますが、その会費を地域のいろんな活動、――地域を盛り上げようという活動、あるいは花を植える、というような駅舎の美化活動など、外来のお客様を迎えられるような駅づくりの活動をしていただける団体に、サポーターズクラブの会費で少しでも支援させていただこうという考え方なんです。

そういう活動がより活発になっていくと、いろんなものが良い方向に回転していくのではないかなと思っています。

このサポーターズクラブは、「鉄道と地域の活性化に対するサポート活動」だということをぜひご理解いただきたい。そういうことも大いに皆さんに発信していきたいと思っています。

最後に直江津駅（駅前）の利便性について。たとえば、佐渡航路への基点としての直江津駅。また駅前の利便性を考えたとき、直江津学びの交流館という公共施設もあります。

そうですねえ、交流館はうちもよく使っています。

今日（九・二四）も来春の採用試験をやっていますし、交流館は非常に使い勝手がいいといいますか、鉄道を利用する人にとってすごくいい立地ですよね。採用試験の高校生が埼玉とか秋田からも来るんです。

彼らも分かりやすいと言います。駅前のホテルに泊まると隣が試験会場。ついでに「沿線を見ていく」と言っていました。

直江津とは、やはり交通の要衝ですね。佐渡航路もあります。

公共交通の基本は大量輸送機関ということですから、ある程度のボリュームがあれば、なんでも成り立つわけですが、数がなければなかなか走らせられない。そういう意味で小木航路のお客さまが増えてくれれば、そこから降りたお客さんをどうするか、ということを誰しも考えるわけです。

それは「トキてつ」も考えますし、マルケーさんも考えます。そこに直江津ということを考えますと、いろんな方向に選択肢を持っている所ですよね。そういう利点をどうやってアピールしていくかが大切じゃないかなと思います。確実に航路は増えると思います。高速船も就航しますし。

旅行客は、同じルートを往復するのは嫌がります。一方で周遊というのは、すごく得したような気になる。せっかく何日間も旅行するわけですから。上越新幹線で新潟から佐渡へ渡って、今度は小木航路で直江津港へ上って、今度は北陸新幹線で東京に帰ることになったら、魅力がありますよね。ただ同じルートでは本当につまんないと思います。それが観光の醍醐味だと思いますね。

そういう面で色々な周遊ルート、長岡から直江津へ廻るルート、ほくほく線で来るルートもある。全部直江津へ来ます。

新たな「鉄道のまち」が出来る可能性があります。

付録　逆インタビューされました。

嶋津　定期的に直江津のまちめぐりをしている会があり

ますね。あれはいかがですか？

編集子　ライオン像の建物をまちづくりに活かす会です。三八朝市のある土・日・祝日に、ライオン像の家を市で公開していますが、その時に合せてまち歩きだけではなくイベントもやっています。

嶋津　それはいいですね。朝市にぶつけて、毎月あるわけですね。

編集子　朝市の常連さんでも「あんまり入ったことないなぁ」なんていう方もありますし、直江津まちなかアテンダントの小松さんが、直江津の物語を語るイベントもあります。

　JRの「越乃 Shu ＊ Kura」のお客様も待ち時間に寄っていきました。「ぶらっと来たが、おもしろいまちでビックリした」という人が多いですね。

　もう一つ、佐渡汽船から降りたお客さんに、直江津のまちも知ってもらおうと「ぶらっと港まち直江津号」というバスツアーの実験をしている会があります。「女性みちみらい上越」という女性の会ですが、お昼は春ちゃんの海鮮丼か、ニューハルピンのラーメンかどちらかを食べてもらう。そして先ほどの語りをライオン像の家でやってもらって、ちょっと街めぐりをしながら駅前で降りて、三野屋さんとか、かねきゅうぼしで買い物していただいて、「はくたか」に乗って帰る。試験的ではあるんですが大変好評のようです。

嶋津　なるほどねえー。いやあ本当に素晴らし活動だなって思っておりました。そういうものが、なにかの形で「トキてつ」の車内とか駅などで広報ができると面白いなあと思っていましたので。

長時間にわたるインタビューありがとうございました。



定期的に行われるまち歩きガイド





「ぶらっと港まち直江津号」ツアー
トキてつとの連携が期待される

特集

越後国府・越後守護所・春日山城・福島城・高田城へ至る道

「高田開府400年」の意味 その3

◆高田城は危機管理の城◆

小島幸雄

はじめに

「高田開府四〇〇年」の年も終わろうとしている。今年はさまざまな行事が行われ、松平忠輝が大坂の陣前夜に急遽築いた城下町の四〇〇年を祝った。しかし、開府四〇〇年は単なる高田築城四〇〇年ではない。越後国の太守が、一国を代表する城を築いて四〇〇年、このことから「高田開府四〇〇年」ということなのだ。

今回は、開府の意味を整理しながら、高田城下町の姿をたどってみたい。前段には三三号で書かせていただいたことを整理する意味で簡単に経過を記している。詳しくは、三三号を参照いただければ幸いである。

吹上遺跡の出現

頸城の歴史を考えるときに欠かせない遺跡の一つは、上越妙高駅の少し南の稲荷に所在する吹上遺跡である。吹上遺跡は弥生時代の中ごろ、約二二〇〇年前にヒスイの勾玉を生産するために突如出現した集落である。ヒスイの生産は長続きせず、生産の場所そのものはヒスイを産出する糸魚川に移ったと考えられている。しかし、集落はそれから約五〇〇年も継続していたことが分かっている。そのことは、吹上遺跡が頸城の中核を担う集落であったことを如実に示すもので、勾玉の生産地という一面を持ちながら、有力者の生活の場であったことが推察されるのである。越後では最大級の弥生時代の墓、方形周溝墓が確認されているのも吹上遺跡なのである。そして、吹上遺跡の五〇〇年は弥生時代から古墳時代に移行する時代、我が国に中央集権国家が成立していく時期と重なるのである。

濠で囲まれた都市の出現「釜蓋(かまぶた)遺跡」

五〇〇年継続した吹上遺跡は、その間ずっと同じ規模であったわけではないようだ。消長を繰り返したようなのである。その間に、ちょうど古墳時代が始まる前後の時期に現れたのが釜蓋遺跡である。集落を濠で囲んだ形状から環濠集落と呼ばれている。

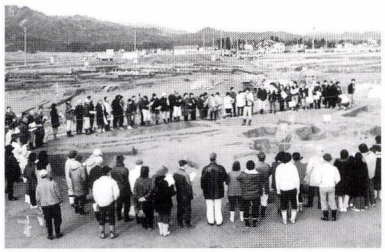
釜蓋遺跡は、頸城の初めての国の姿だと推測する研究者もいる。濠で囲む姿が防御を意図したものとして考えられていることが、理由の一つである。加えて、釜蓋遺跡の位置する場所が扇状地の端に位置することから、濠

は防御だけでなく治水の効果も果たしていたものと考えられる。筆者は、治水が主目的だと考えているほどである。

黒田古墳群がつくられる

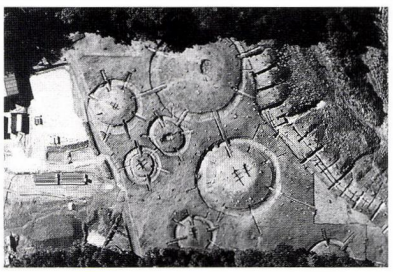
頸城平野西端、黒田小学校の西側の丘に黒田古墳群がある。古墳時代中期（約一五〇〇年前）に属する古墳群で、考古学の世界では、古くから知られていた。中期の群集墳（ある地域にまとまってつくられた古墳の集まりをいう）としては、魚沼地方の群集墳とともに越後を代表するもので、頸城と魚沼にあった勢力の権力の象徴として築かれたものであろう。

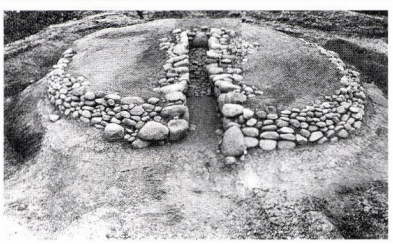
これまで見てきたように、吹上遺跡の出現によって弥生時代中期にはじまった平野西側の人間行動の、痕跡は釜蓋遺跡や黒田古墳群などの貴重な遺跡によって知ることができる。なお、妙高市の斐太遺跡も古くから知られ吹上遺跡や釜蓋遺跡に先行して国の史跡となっていて、吹上遺跡と釜蓋遺跡も斐太遺跡とともに国史跡になったが、それらは関係については本文の趣旨から外れるので詳しくは述べない。



現地説明会で方形周溝墓を取り囲む市民（吹上遺跡）







上　濠の底から並んで出土した木材（釜蓋遺跡）
中　黒田古墳群
下　水科古墳群（三和区）

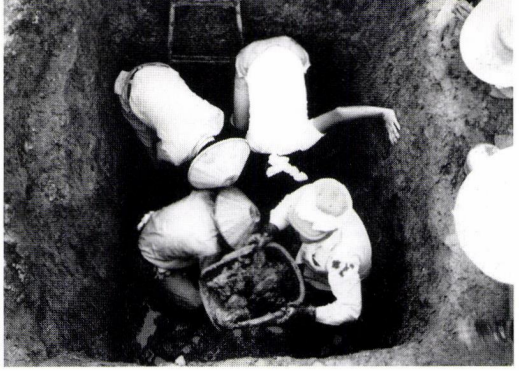
宮口・水科古墳群は日本海側最北の群集墳

古墳時代中期（約一五〇〇年前）まで、黒田を中心とした周辺に古墳が造られていた。吹上遺跡から続く、青田川扇状地を稲作の経営基盤とし、この古墳群を造った集団は次第に大きくなり、稲作をする空間が不足してきたのではなかろうか。それを解決するには、より広い空間を求めることが解決の近道である。この答えは、三和区水科から清里区菅原にかけて分布する古墳時代後期の古墳群が示してくれている。二〇〇基を優に超える数の古墳群は、古墳時代の終わりころに造られたもので、日本海側最北の群集墳として水科古墳群と宮口古墳群が国の史跡に指定されている。

どうしてこのような大規模な古墳群が形成されたかは、その前面に広がる広大な扇状地に目を向けると解決する。飯田川や櫛池川、それに別所川が関田山脈から大量の土砂を運びだし、平野の出口に累々と堆積を繰り返した痕跡が、現在扇状地として認められるのである。青田川とは比較にならない広範囲の扇状地は、多くの人々の食料を確保するに十分な水田耕作を可能にし、多くの古墳を作る原動力になったことであろう。

都市は空白地に作られた

越後国府が頸城に置かれた時期ははっきりしない。筆者は、和銅五年（七一二）に越後国から出羽国が分けられて、越後の国域が確定したと同時、もしくはその年代を大きくくだらない時期だと考えている。越後国府の位置はいまだ定まっていないものの、奈良時代に置かれた国府は三郷地区とする説が斯界の大方の意見である。では、なぜ三郷地区であったかを考えてみよう。



大きな井戸を発掘する
（今池遺跡）

頸城平野に進出した古代の大遺跡

水科・宮口・菅原などの古墳群を造れるような、安定した稲作経営が可能であった土地は地方豪族を育て、越後国の国府を定めるに際して位置決定の最大の魅力になったこと容易に推測できる。古代国家の地方事務所の経営は、地域に存在した豪族の力無しには成り立たなかったであろう。もう一つの理由は、越後国で京に最も近くて安定した広く平らな土地が広がっていたことであろう。「三郷地区の歴史・史跡を研究する会（会長　横尾彰平さん）」が集成した明治時代の公図によると、古代の課税基準として区画された土地（条里地割）の姿が明治まで残っていることが確認されている。そして、この土地は新しい都市計画をするに必要な条件、大きな空間が存在していたことを示していたものと推測できるのである。集落が形成されていなかったと考えることが妥当だと思えるのだ。

国家事業であれば、農民の集落を動かすことはできたであろう。しかし発掘調査の結果を見ると、国府を作った場所はそれ以前に大規模な集落が営まれた形跡が見られない。全くなかったというわけではないが、それ以前に存在した地方豪族とは別の区域を選び、それらと共存する方法をとったと思えるのである。古墳時代にはいまだ安定期に入っていなかった頸城平野の乾燥化が進み、大規模な政庁とそれにかかわる多くの役人が執務できる場所を確保できる空間に恵まれた土地、それが国府設置の条件であったことは否めない。

さらに、国府所在の要件がある。交通路である。道路だけではない、水上交通路も重要な国府所在の条件なのだ。それには、三郷地区はまさにうってつけの場所であった。関川と矢代川が合流する地点で水量が多く舟の航行を保証し、関川によって削られた段丘崖は水害を防ぎ、物資の運搬が容易で安全な場所が確保できたのである。今池遺跡群の発掘調査が始まった昭和四五年、それまで見たこともない大きな建物の跡に目を見張った。人がすっぽり入ってしまうような柱穴が七間も並んだり、それらが規則正しく同じ方位で並んだ様子は、今でも目に浮かぶ。しかし残念ながら、国府の政庁がはっきりせず、国府の断定はできなかった。

古代国府は政庁と国分寺・国分尼寺の三つの象徴的な施設があった。越後国ではこの内の一つも発見されていない。無くなったわけではなく、穀倉地帯であったがために長い年月をかけて土地が平坦化され、特に昭和三〇年代以降の耕地整理によって一面真っ平らな平野が形成されて、その姿を失ってしまったものと考えられている。早く国分寺の所在を知りたいものである。

高田は越後一国の太守の城

時代を早く進めるため、時代を安土桃山時代に移そう。福島城については前号で述べたが、その際割愛した事柄をここで述べることとする。今年総合博物館で開催された高田開府四〇〇年記念特別展「越後の都高田と徳川家康の血族」に展示されていた、豊臣秀吉が堀秀治にあてた知行目録がある。この文書は、現在は大阪城天守閣が所蔵している。この文書が、越後一国の太守の城であることを示すものであることを意味しているのである。

文書は、越後一国の石高は四五万石であるとしながら、秀治一人の名ではなく、此内として越後国内の武将や家臣たちの石高も記載されている。このうち、村上と溝口は与力大名で、秀治以外は国持ち大名ではなく、秀

治の越後統治を助けるための武将たちであると理解される。図録にも、「堀家はそれぞれ独立性の強い一族・重臣の連合体であったと考えられています」とある。

そうだとすると、松平忠輝が福島城主となった時も福島城主ではなく越後の太守として君臨し、統治していたことになる。これはとても重要なことで、高田開府四〇〇年というのは、高田に城が築かれて四〇〇年ではない、越後一国の太守の城として城下町が開かれて四〇〇年、したがって「高田開府四〇〇年」という、筆者の言葉の意味を理解していただけるのではないだろうか。福島築城が開府の始まりなのだが、松平忠輝という徳川家の血脈をもつ大名が築いた城下町であるがゆえに、高田開府の名が生まれたのであろう。

余談であるが、知行目録に興味深い記載があったので付け加えさせていただく。文書の最後に

「一五千石御蔵入　但　越後布出所

同其廻　」

という記載がある。御蔵入とは秀吉の直轄領であることを意味し、秀吉が越後上布を重要視していたことがうかがえるとされている。たかだか五千石を明記し、越後布の生産地を自身の領地としたのは、上杉氏が掌中に収めていた青苧の権利も、秀吉政権下では太閤のものとなってしまっていたのだ。佐渡の鉱山もまた然りで、こんな越後国の産物を欲した秀吉による景勝の国替え、そして秀吉近習であった堀秀治の越後太守就任であったのかもしれない。旧権力の否定、そして経済の掌握が、景勝と秀治の国替えの根底にあったと考えるのも一理あるのではなかろうか。

会津の昭和村では今でも青苧が栽培されて特産となっている。景勝も会津に国替えを命じられながら、新領地でも青苧を奨励したことがうかがえる。越後布の出所とその廻りとはどの程度の広さを示しているものかはわからないが、五千石とは何を示しているのか知りたくなる。

展覧会には、秀吉が景勝にあてた国替状も展示されていた。ご記憶の方も多いことだろう。この文書は、秀吉が推進した兵農分離政策を示す一例と解説されていた。文字で書けば兵農分離だが、それは経済を支える労働者を土地と一体に確保することを意味しているともとらえられ、それを示す例が先に挙げた秀治宛ての文書の最後に記されていた、越後布に表れているように思えるのである。そのような意味を込めて紹介したものである。

福島城下町も越後府中ではなく空白の関川右岸を選択した

福島城の位置については前号で記したので割愛するが、古代越後国府が比較的大きな空白地に造られたことを推察したように、越後府中と春日山城が存在した町を改造することより、数少ない村を移動させて築城したと考えたほうがより自然である。ましてや、越後府中は上杉氏の影響が色濃く残り、秀吉によって国替えされた堀氏が上杉氏の残影が濃い府中を捨てて新天地を造ったと考えるのがより理にかなっている。

ところで、高田築城はどうであろうか。これもまた、移転の理由はともかく、現在の高田を選択した理由としては、都市計画のしやすい土地であったことがその理由の大きな部分を占めていたと考えられないだろうか。町が既に存在していたとしたら、いくら封建制の時代とはいえ、経費も時間もかかり豊臣対徳川の決戦間近の時代にそぐわない考え方であったろう。なぜ高田なのかにつ

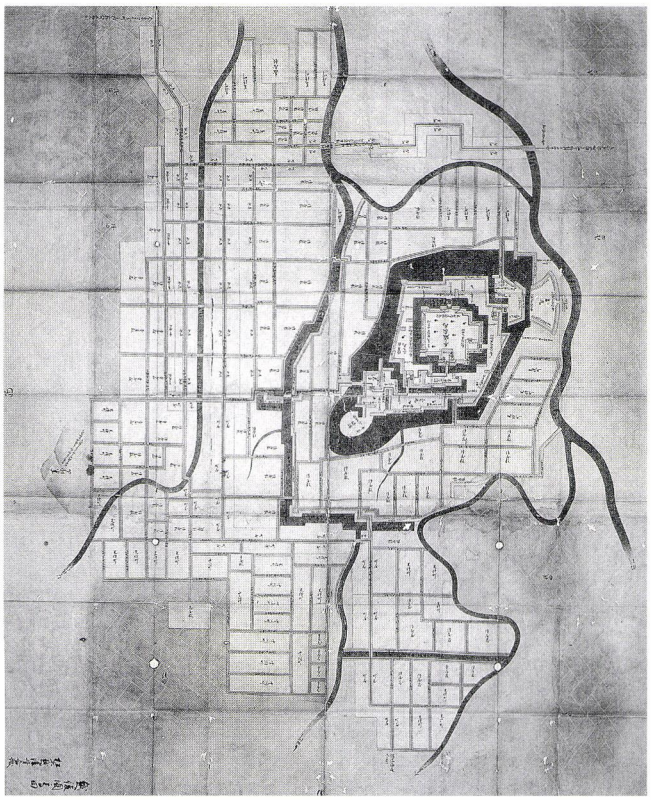
いては、中西氏の論考を参照されたい。

高田城下町の出現

これまで、頸城平野の二二〇〇年前から福島城築城までを整理してみた。そこからわかることは、越後という国の国域が定まる以前も地域の中核となる遺跡が頸城平野に集中していたこと、国域が定まって国府が設置される際にはそれ以前の権力がいた場所ではなく、新しい土地が新権力の中心としてつくられたらしいこと、そして水上交通路の至便な場所が選ばれているらしいことがわかってきた。

このような観点で、高田城下町を見ていこう。

まず、地理的な位置関係から整理しよう。現在の高田城の地理的な環境を見るとき、われわれはどうしても住宅が目に入ってしまい、自然条件をそのまま理解できないように思えるのである。たとえば、元文二年の絵図を見てみよう。高田城の北東にある神明社が描かれていることがわかる。しかし、その南には大きく迂回する関川が描かれて、今見られるような住宅地はない。現在は東城町となっているところ、用水から東側は江戸時代には利用されていなかったことになる。



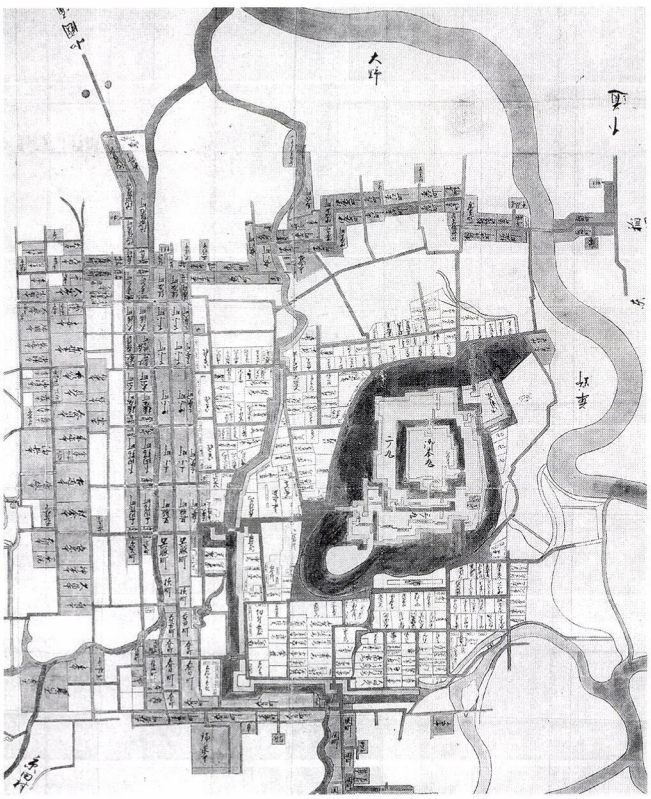
「正保国絵図」（太陽コレクション「城下町古地図散歩3」より）

四〇〇年前の防災都市

高田城下町の防災について考えてみよう。

福島城の決定的なマイナス条件が水防にあったことは述べた。最も大切なことは、マイナス条件が町民の住む町屋が治水に不適格だったことだ。城、特に本丸は土が高く盛られて水の備えができていたが、城下町は標高が低いだけでなく、平野の東から流れ込む河川の水が城下町に集中していたのである。今の状況とは全く違い、治水が難しかったと推測できるのである。

高田城は、福島城の最大の課題、というかマイナス条件である町屋の水防を克服できた構造であった。城下町の最も標高の高い地区に町屋を集中させたのである。本町をはじめとする町名の後半に本町という地名が付けられている町屋地区が、城下町の東の端に位置する高田城をコの字状に取り囲むように配置され、町民の住宅や店舗が水害に合わないように都市計画されていた。しかし、水害に合わない一番の条件は水から遠ざかることだが、これでは火災に対して無防備になってしまう。それについては、青田川と儀明川の付け替えと掘り替えによって解決したと考えてよい。この二本の河川は、今も高田城下町を南北に流れているが、筆者は火防のためにあえて二本を並行するように流したものと考えている。そして、この並行する二本の河川の間に挟まれるように、家並の



「元文国絵図」部分（太陽コレクション「城下町古地図散歩3」より）

した唯一のものである。絵図には墨書で「越後国高田松平越後守居城」とあるので、光長時代の高田城下町絵図であることがわかる。本丸の三重櫓の位置には二重の櫓が描かれていることから、寛文五年（一六六五）に起こった大地震の前に制作された絵図であることは明白だ。

本図は青田川の描き方に特徴がある。青田川が新たに掘られたものであることは前に記したが、もう一か所今の北城町に東西の川が描かれているのがわかる。これこそが青田川の機能を示しているものなのだ。総構といわれるもので、高田城下町の総構は青田川であったことが知られる。総構の中には、「侍屋敷」と墨書され、それ以外の記載がない。これは武家のみが居住しており、町民は住んでいなかったことを示している。今の地名でいえば、北城町、西城町、南城町、東城町である。武家屋敷は一戸建てであり家が連担せず、現在でも雁木がない。

総構の全容を記すと、お城の東は関川、南は矢代川と百間堀と青田川、西は青田川、北は古川（青田川の付け替え前の川か？）ということになる。これが城を守る最終ラインなのである。そして、総構の周りを町屋が取り囲み、西側に寺町が造られた。しかし、寺町は今のような景観ではなく、二列にはなっているものの現在の表寺町が城下町の最終ラインとみられている。現在見られる高田城下町の景観は、寛文五年の地震後に行われた復興による都市計画によって形成されたのである。

現在の城下町の姿になった元文絵図

元文二年（一七三七）に制作されたもので、現在の高田の町並みがほぼすべて出揃っている。この絵図で注目したいのは、城下町に空白があることだ。本図は、武家

裏口に沿うように防火用水が通されていた。これは今でも火防道路と呼ばれ、水路が整備されていることからも理解できる。

特に青田川は、南本町三丁目で本町裏へ直角に西向き曲げられ、さらに本町裏で北に直角に曲げるという、極めて都市計画的な改良がなされた。かつて、南本町三丁目で青田川から百間堀に向かって地下導水管があると聞き、現地でご教示いただいたことがある。導水管は百間堀の水量を確保し、フレッシュな水を堀に供給するため不可欠な施設だったのであろう。これも、町民の生活環境に配慮した施設ではなかったろうか。

築城期の高田城下町

江戸時代前期、正保年間（一六四〇年代）の制作とされる絵図が残されている。高田城下町の古い姿を示


高田城三重櫓

屋敷には主の名を記し、町屋には通りの町名が明記されている。寺町には寺社の名が見られるので、空白地は建物がなかったと理解してよいものだろう。

この空白はなぜ生じたのであろうか。それは、松平光長と光長改易以後の藩主の藩の規模によるものである。城下町が大きすぎるのだ。城下町の中に水田が出現したのだ。白地は水田であったことを知ることができるのは、北城町にあった「中島たんぼ」という地名と、高田駅の周辺に残る水田だ。「中島たんぼ」はすでに市街化されてその面影はない。しかし、線路の周りの水田は今でも少しながらその形をとどめている。

高田駅が今の位置になった、信越線が高田の町を東西に分けるように仲町と寺町の間に敷設されたことを考えてみよう。明治の鉄道は地盤のしっかりした土地を選んで敷設されていることが知られている。現代のように大型の機械が導入されている時代と違い、明治は人力が主であったので沖積地でも河川の影響を受けにくい土地が求められたのだ。高田は忠輝によって町屋が城下町の一番高いところにあったのでまさにうってつけであった。さらに、城下町に南北に延びる水田があったので、まさに良好な土地と町に近い地理環境が得られたため、駅が城下町に造られたのである。町を改造する手間がいらないうえ、利用する住民にも近い場所が無条件で駅を呼び込んだのである。ライトレールにも通ずるかもしれない。

高田城と城下の荷揚場

高田には上と下の荷揚場があった。稲田橋の上流と下流に設けられていたもので、上流の上の荷揚場は位置的に城内となっているので城内で必要とした物資が、下の荷揚場には城下町の物資が荷揚げされたのであろう。

福島城の絵図を見ても、「御上場」という記載が確認されることから、城には荷揚場が併設されていたことが知られるのである。これも三三号で述べたが、直江津駅の下に眠る「守護所（越後上杉氏の館）」は御館川と一体で築かれたことがわかっていて、府中の荷揚げが守護所の管理下に置かれたと推測されている。

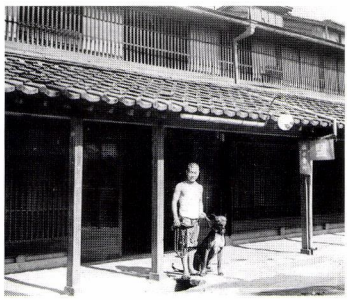
時代を経ても築城に際しては大量輸送が可能な水運を見据えた城地の選択、河川改修が行われていたとみてよい。経済を支える物資の輸送は、藩経営の基本政策であり、高田藩に限定されるものではない。いろんな城下絵図を見ても川が周囲を囲む例は多々あり、水と戦い水によって経済が支えられていたことを推し量れるのである。

今年十一月、石川県小松市で「こしのくに国府フォーラム」が開催された。古代の「越」から生まれた越前・加賀・能登・越中・越後の五国の国府所在の五市が集って古代国府の場所と交通を議論した。その中で、五国の国府がいずれも川や海に面していることが確認され、物資の流通に川は国府と不可分の関係にあったとされた。川は、江戸時代のお城の問題ではないのである。さらに、国府が古墳時代後期や飛鳥時代の遺跡とは必ずしも同一地点ではないような地域が選択されているらしいことも指摘した。案外、場所の選択当たっては、生活の空白地を候補としたのかもしれない。

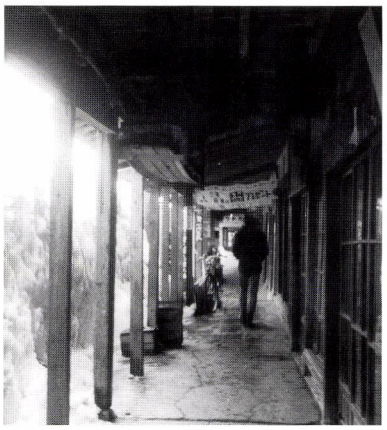
高田城下町をみる

高田城下町は寺町からみていこう。

城下町の西に六六か寺並んだ景観は、全国的にも珍しく、筆者は見たことがない。熊本城下町に同じような寺



大正初年の雁木通り





上　雪から通行を守る雁木
下　新しい「雁木」通り

町があると聞き、城下絵図を確認したことがあった。確かに一か所にまとまって寺町が形成されていたように見られたが、高田のような一列に並んだものではなく、四角くまとまっていたことを記憶している。

高田の寺町を詳述したものに、本誌一七号の中西聰氏「〈高田〉のまちにこめた祈り」があるので詳細はそれに譲る。中西氏は寺町を「西方極楽浄土」ととらえ、計算された城下町の形と理解されると記している。興味深い論考なので、是非一読をお勧めする。

寺町が二列に並ぶようになったのは、寛文五年以降のことだ。寛文の大地震は、町を壊滅状態にした。その期を逃さずに都市改造を進めたのが松平光長である。仲町の西にあった寺町を一列さらに西に移し、二列の寺町を作り出したのだ。ここに、高田城下町が完成したとみてよい。先述の信越線の敷設にかかる条件もこの時にできあがったのだ。

文化庁が寺町を伝統的建造物群として見ることを中止した時期があった。地図だけ見れば寺域が東西二列に整然と南北に一直線の街並みと映る。しかし調査官が見たものは寺域に立ち並ぶ民家の姿だったと聞いたことがある。伝統的な町並はならなかったが、全国に誇れる寺町であることに異論はない。

仲町は四十物の町

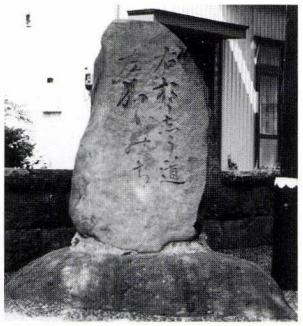
仲町の今の姿はネオン瞬く夜の町だが、江戸時代は魚や魚を原料とする二次製品を含めた、四十物（あいもの）の町として栄えていた。かつて、仲町は田端町と呼ばれて福島城下から移転した魚の専売権をもった町であった。その頃の記録が今も残り、「田端町文書」として市の文化財に指定されている。

仲町にはもう一つの顔があった。桶屋町、大工町と呼ばれていたように職人の集まった町でもあった。桶屋が仲町に集約された理由の一つには、田端町が四十物業であったことに理由がある。現在のように高速交通がなく冷蔵技術も未発達な江戸時代は塩蔵が不可欠であった。塩引鮭や高山・松本の塩鰤などは、まさにその例である。海の無い高田に蒲鉾屋があるのも、魚の専売権をもっていた田端ならではの製造業である。職人の種類も町の名が示すように、大工や鍛冶屋などで、町民や近在の農民が利用する職種が多かったようである。

本町は街道の町

本町は、北国街道が通っていた。街道には、高田の人ばかりでなく街道を行き交う他国の人も多く集まる。したがって、町の形も外向きに作られ、呉服町の名が端的に示すように商人の町として栄えた。

東本町・南本町・北本町も同じ街道の町である。東本町のみ奥州街道であり、他は北国街道である。本町七丁目には道標が立っていて、「左かが道　右おうしう道」と刻まれていた。





右　北国街道の道標（宇賀魂神社境内）
左　道の先がクランク状になっている
（本町７丁目）

大町は北と南で違う町

大町は、駅前の通りから少し北に向かうと突然道幅が広くなる。仏壇屋を皮切りに、染物屋、紋屋、家具屋の看板が並ぶ。道幅も高田城下町では最も広く、特別な空間であったことが推測できる。いずれも、城下の人たちが利用するというより、武士階級が利用したと考えるのが妥当であろう。道幅が広いのは、武士が往来しても至近距離にならないように配慮されていたと考えたらいかがだろうか。テレビドラマで、刀が触れ合って殺傷事件に発展するというシーンがあるが、あながちそんな光景を避けるための配慮があったのではなかろうか。

以上、町屋の景色を見てきた。街道筋には商家が立ち並ぶ姿が見て取れ、街道から一歩入ると職人町となっていたようである。このような姿は、今でも見ることができるので、是非城下町散歩をお勧めしたい。

武家屋敷は城町でわかる

東西南北の城町は武家屋敷のあったところである。町割りは四角く、いずれの道（路地といってもよい）も見通しが利かずT字路かクランクになっていた。町屋の通りが見通せるのと大きな差がある。ただし東本町はクランクが続き、他の町筋とは若干異なった景色が見られる。

武家屋敷の大きな特徴は雁木がないことだ。必要がなかったわけではなく、各家が独立していては雁木の造りようがない。これが街並みを見て歩くポイントだ。町を見るのではなく、造りとして建造物を見ていったらよい。

雁木についてのつぶやき

在京の方が高田の雁木は本町のアーケードで地に落ちた、というようなことを述べられたことがあった。筆者はそうは思わない。素材が変わっても、江戸時代から続く高田の街並み形成が示すように、地域を支える共有空間として成り立ってきた。アーケードは鉄製であっても、機能は木造と変わりはなく、雨や雪を避けれるものである。私は、常々声を高めてサンサン通りと五番街を現代の雁木だと言い張っている。読者の皆様にもその意をお伝えしたと思い記したものである。

三葉葵紋の瓦

徳川家康の六男松平忠輝築城の高田城を見ているような出土品がある。今年の七月に高田城本丸御門の発掘調査で出土した、三葉葵を表現した瓦である。

瓦は鬼瓦の一部で、中央の鬼が表現される部分に三葉葵が作り出されていたものである。時代ははっきりしない。それは、出土した場所が溝で、江戸時代の門の基礎を一部破壊して造られていたことがはっきりしているからで、明治になってから排水のために造られた溝に捨てられたようなのである。発掘当初は古いのかな、忠輝かなどといろいろ考えたが、詳細はもう少し調査しなければならないだろう。

三葉葵は言わずと知れた、徳川家の家紋である。徳川以外では極めて限られた使用しか認められてはいない。このことを条件に瓦を見てみると、また別の瓦の評価になってくる。たとえば、佐渡から金を江戸に運ぶ際にいくつかのルートが知られている。北国街道もその一つで、おそらくもっとも安全で確実なルートではないかと思っ



高田城本丸御門跡から出土した「三葉葵紋鬼瓦」
（上越市教育委員会）

ている。だとしたら、江戸に運ぶ金を安全に宿泊させるためには城郭が最もふさわしい場所である。そのために、高田城を使用したとしたら、当然三葉葵を使用した建物が必要となる。瓦は、明治時代の溝の中から出土したと記したように、どのようにそこに持ち込まれたか不明である。使用には異論がないわけだから、どこでどのように屋根に葺かれたのか、使用の場所とその意味が大切となる。忠輝が使用したというよりも、使用の可能性が広がっていくことも予想され、とても楽しい推論が可能となるのだ。たった一つの、それも掌に乗るような小さな瓦だが、妄想も含めて大いに語り合いたい愛おしい瓦である。

危機管理の城として

高田築城期の危機管理は、もちろん大坂の陣である。しかし、視点を変えると水防の城、水害に対する危機管理の城と見えるのは筆者だけであろうか。

福島城は、日本海交通の要衝に位置する郷津という天然の良港を背景にした、物流を最重要視した巨大城郭と見て取れる。まさに、大阪城のような運河によって囲まれた城を連想させるものだったに違いない。しかし、大きなマイナス条件が潜んでいたと思えてならない。それは、頸城平野東の河川から流れ出る水がすべて集まる場所だという条件である。

水は土木技術の発達した現代でも、時として人を苦しめている。毎年のように繰り返される水害は、人の英知だけでは避けられない猛威なのだ。それを防ぐように計画されたのが高田城ではないだろうか。

高田城は、中西氏が指摘したように家臣団屋敷を平野の低い部分、いわゆる関川が形成した高田面に位置させなければならなかったという欠点をもっていた。しかしながら、城を支える経済の担い手である町民は、水害による疲弊を避けることができたのである。家臣団屋敷は、町民が元気なら作り変えることは可能である。しかし、疲弊していたら、住むところの保証がなかったら、家臣団の屋敷まで手が回らないことになろう。ここが高田築城の大きな要因であったと思えるのだ。

高田開府四〇〇年は、私たちに危機管理の重要性をも伝えているように思えるのである。

結びにかえて

ながながと書き連ねてきたことは、前項で記したことに尽きる。開府四〇〇年を危機管理元年として次世代につなぐことも、たまたまその年に立ち会うことができた私たちの責務であろう。そして、一〇〇年後には現在生存している市民の大半がいないことは容易に想像がつく。そうであればこそ、四〇〇年前に危機管理をしてくれた忠輝の築城の意思にならい、現代人として後世に伝える努力をしなければならない。

もう一点、忘れてはならないことがある。越後の国府が、同じ頸城平野の中で移動を続けたことである。和同五年（七一二）に国域が定まって以来、頸城は明治に至るまで一一五〇余年の間、越後国の国都であった。これに異論をはさむ余地はない。このことが、越後国、言い換えれば新潟県本土で唯一「開府」を冠した町の発祥を唱えられるところなのである。

高田開府の基層は福島城にある。これが最後に申しあげたい一言である。堀秀治の越後府中の福島移転があればこそ高田移転も生まれたのだ。まさに福島築城が開府四〇〇年の元であることを示して結びにかえる。

（上越市専門学芸員）

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

福永十三郎の恩



昭和７年に建立された福永神社社殿
（平成１年撮影）

北越鉄道株式会社が明治三六年に発行した「新編北越鐵道案内」という冊子がある。各駅の距離や料金はもちろん沿線の町や見どころを魅力的に紹介するガイドブックである。同書の直江津の紹介に、

…松平忠輝これを領し、いくばくもなく同郡高田に移る。このときまた津の人民多く彼の地に移住せしより、大いに衰退を見る。時に津の豪商福永、石井等苦心尽力…。

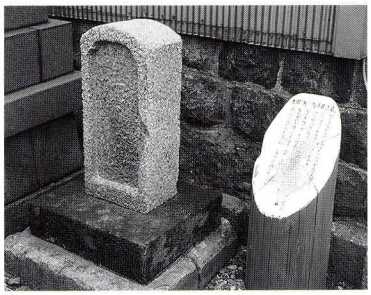
という興味深い一文がある。また白銀賢瑞は『直江津町史』で、歴史家布施秀治が明治四十年「高田新聞」の〈上越繁盛論〉に、直江津の歴史を「奮闘的市街の好模型」と題して直江津を論じたものを「実に簡にして要を得たる高田藩政下の直江津の姿を如実に示されてある」と、左のように紹介している。（筆者において適宜省略した）

高田町は城主代々の寵児としてあるいは保護、あるいは免税あるいは特権、あるいは奨励と愛撫至たらざるなき待遇に与かり、桃源場安逸春の夢を結びつつある間に、直江津はあらゆる天然人事の迫害を蒙って奮闘苦戦を続けてきた町である。高田移城以来は直江津の本元（権益保持者）を高田へ連れて行ったわけであるから、残ったのは抜け殻である。その抜け殻はまた太る。太る抜け殻の繁昌と高田城下の繁昌とは両立しないから、直江津の利益はことごとく高田に絞るのが越後少将様（松平忠輝）以来、各時代の藩主の取った政策である。

魚類、食塩、茶、材木に至るまで直江津人の自由商売は許さぬ。地で獲ったものも旅から輸入したものも悉くいったん高田問屋連中の手に渡らねばならぬ掟である。

福島城時代の事で、四十物（あいもの）売買の特権を田端外二町に与えた免許状がある。高田へ移ってからもこの特権が離れぬので、頸城郡の御料理の実権と利益とは残らず田端へ落ちたのである。直江津一般に蒙る利益は肴商売で、殊に信州地方への輸出は大いに儲かるのである。しかるにその商売は高田の独占で、鰯その他の雑魚の外は振り売りさえ堅く禁ぜられて、見す見す儲けは高田に占められてしまう。

信州方面へ輸出する物の内で一番儲かる食塩商売も高田繁昌の政策のために蹂躙されてしまったのである。直

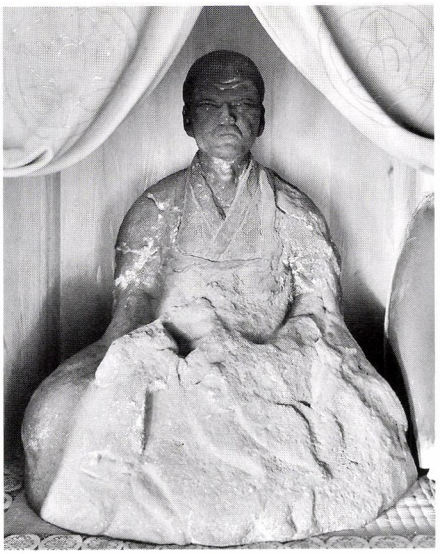


越の海勇三の墓
延寿寺（住吉町）

江津輸入の旅塩はことごとく高田小町三町の塩問屋の手に渡った後でなければ捌く事は出来ぬのである。

城下繁昌のためには何物をも顧みざる城主の政略として直江津の儲け口はことごとく高田へ持って行ってしまった。直江津人の憤慨さこそと察せられる。

利に敏なる今町商人もさる者、盛んに法網を潜った。即ち抜荷をやった。今でいえば密輸出入である。そこでこの取締方法として領主は二策を案じた。一は陣屋の設置、一は番所を置いての犯人捕縛法である。陀羅尼口、伊勢町口、稲田口の三か所に番所を置いて売貨を検閲して通行手形、切手〔送り状〕等を改めた。





上　灰塚地蔵
左　明治15年に調製された「福永十三郎翁顕彰掛軸」福永十三郎翁顕彰会・徳泉寺収蔵（東雲町）

陣屋は明治四年まで新川端町にあった。領奉行組下二人宛出張して警察、監督、収税の権を振り回した。ことに滑稽なのは陣屋前に据付けてある鉄砲で、ずらりと並んで威権嚇々たるものであった。

町から取あげた税金は、もとは約三万両もあったが後には八千両位しかならなかったそうである。一定の税金の外に折々御用金がかかると早速耳を揃えて上納したという。迫害を受くる事大なりといえども、また利益する事も少くなかったらしい。

まことにわかりやすい解説である。

白銀は続けて、高田は何故に今町に対してかかる商業及交通政策をとったか、それは城下町繁栄、即ち自衛策であって、また今町を伝馬宿駅街道から除外したのは、港へ入津する貨物の横流しを恐れたからであると思うが、入津貨物中の最も利潤の多い、しかも多量の輸入貨たる魚類、塩、材木、茶を高田商人に独占させたことは、今町商人としては堪えられない事であったであろう。最も今町商人を拘束したのは松平越中守時代であった。榊原藩もこれを継承していった。

今町陣屋の存在は権限外にまで立ち入って事毎に今町商人を制圧せるため、商業活動を阻害することが大きかった。組織的抜荷の行われたこともその反動と見るべきである。と述べている。

直江津の恩人として祀られる福永十三郎の闘いとは

布施秀治が論じた江戸時代の「奮闘的市街」直江津の奮闘、白銀賢瑞の客観的記述、そして後の鉄道のガイドブックにも載るほど、高田藩の直江津今町に対する処遇





現在の福永神社と例祭





十三郎翁ゆかりの「四十物祭り」と祭り限定の「義人饅頭」

ぶりについては、人々の知るところであったことが伺える。

その奮闘ぶりの代表的人物福永十三郎、直江津での初代は上杉景勝の会津移封後、越前北の庄（福井市）から移住したと伝えられ、福井藩士であったが武士を廃して商人になったとも伝えられている。

もとの諏訪区（荒川町）に住み、漁業に従事していたが、ある時期、現在の直江津郵便局の位置へ移り、「越前屋」という屋号で廻船業や酒造などを営み、歴代当主は学問や文芸、政治経済に明るく、代々大肝煎や大年寄りなどの町役人を出している。

福永家では第五代彦左衛門の代から大肝煎として、前述のような処遇に対し、高田藩にその不当を訴えてきた。

十三郎の代になった宝暦一二年（一七六二）、サバとイワシの大漁で田端町でも買い手がつかず、直江津で茶商営んでいた糸魚川藩の勘六が買い取り、塩漬けにして信州へ送ってひと儲けしようとしたところ、田端で差し押さえられるという事件が起きた。

十三郎は、他領の者の商売であるとして勘六に高田藩へ訴えを出させる一方、長年の争いに決着を着けるべく幕府に訴え出たものの裁判は遅々として進まなかった。

この訴訟の噂を聞いたのが、かつて福永家の奉公人で、柏戸について江戸に上がった「越の海勇三」という力士。当時、勇三は越前宰相のお抱え力士で、十三郎が訴訟で難渋しているという話を勇三から聞いた越前公は、勇三を福永家の恩に報いさせようと、老中田沼意次に人を介して働きかけてくれ、幕府の重臣列座のもとで判決が下され、今町の「魚の販売権」が認められることとなった。というのが、今我々が知る「四十物出入り」である。

この事件を後の歴史書で見比べると、意外なことに評価が種々様々で、どれが史実なのか判然としない。代表的なものでは、膨大な史料を駆使した『越後頸城郡誌稿』には全く記述がない。一方『中頸城郡誌』は、越の海の仲介と田端での和解の宴席で「毒殺」されたと記述している。あえて論述を避けているものもある。これは江戸三〇〇年の高田に対する遠慮のなせる業かもしれない。

たしかに、直江津今町も田端町も、もとは根を同じくする「直江津」の人たちであり、確執の当事者たちは時の権力に翻弄された「犠牲者」と言えるかもしれない。

しかし「直江津今町」の人たちが、十三郎の死因を〈毒殺〉と伝え、それを〈義人〉として神社に祀り、今に伝えてきた。その「直江津人の気分」こそ伝えるべきであろう。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

十月末日、日銀の黒田総裁が突然のバズーカ砲での第二金融緩和を、それを受けて為替が百二十円への大幅な円安へ。

その次が突然の安倍首相の「アベノミクス解散」と、サプライズの連発になりました。

来年への引き継ぎ準備をしていた〝お午さん〟も驚いたことでしょう。

「羊さんへ

今年は私もデフレ脱却の為に精一杯スピードを上げ脇見もしないで〝ただひたすら〟突っ走りました。来年はゆっくり噛みしめ皆んなが〝うんメー〟という年にして下さい。

午より」

「直江の津」を今後ともよろしくお願いします。（梅田）

目　次

ロングインタビュー
えちごトキめき鉄道社長　嶋津忠裕さん　4
特集「高田開府４００年」の意味　その3
◆高田城は危機管理の城◆　小島幸雄　18
巻頭エッセイ・このまちのこと　野本　幸　2
歴史は「今日」への手紙
福永十三郎の恩　28

「直江の津」
第一〇巻二号　通巻三五号
発行日／平成二六年十二月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／荻野順次郎
問合せ先／上越信栄社
電話〇二五（五四五）〇二〇二
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2014・1号

直江の津



発行／平成二十六年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン

頒布価格／五〇〇円